

近世哲学研究

第 4 号

-
- | | |
|---|----------|
| 一本の網 (Seil) としての人間
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題—— | 吉川 康夫 1 |
| デカルトの懐疑について
——【省察】の「反論と答弁」を資料として—— | 安藤 正人 26 |
| 市民と国家の媒介
——「国民」形成の一側面—— | 小川 清次 44 |
| 『存在と時間』に於ける可能性概念の
多義性について | 橋本 武志 61 |
| 自然主義的存在論の隘路
——フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己関係的構造」—— | 次田 憲和 78 |
-

1997

Epistola X

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

本誌は、前々号より毎年十二月の刊行を目標とし、今回も無事これを実現することができたが、そのための年間の作業はほぼ次のようなスケジュールで進められている。御参考までにお知らせしておこう。

まず、三月頃よりその年度の論文執筆の応募と依頼を始め、遅くとも五月初めまでに執筆者を決定し、執筆要項をお送りする。原稿の締切は、応募論文は夏休み明け、依頼論文は九月末（ぎりぎり十月半ば）とするが、応募論文についてはその途次、研究室で検討の機会をもち、また最終的に先輩諸氏の閲読と御助言をお願いする。いずれも論文のレベルを確保し、少しでも充実したものを掲載したいという趣旨からの手続きであることは言うまでもない。

こうして十月半ば原稿が出揃ったときから、ほぼ一ヶ月余りの、若手編集委員による誌面作成の作業が始まる。当節、数々の新鋭機器が導入されたとは言え、一〇〇頁余の原版製作のためのコンピュータとのにらめっこは、眼精疲労に十分値する作業であることは間違いない。なお欧文レジメについても、入念な配慮が払われていることを申し

添えておきたい。

このようにして本号も、依頼・応募を合わせて五篇の論文を掲載することができた。内容はデカルトからハイデッガーまでと多彩であり、いずれも意欲作である。執筆の各位、ならびに応募論文の閲読に御協力いただいた方々に、いつもながら厚く御礼を申し上げたい。第四号をもって「創業より守成に」と言うのはいささか尚早かも知れないが、初心を忘れず、確かな育成を心がけていきたい。

編集委員会

代表 蘭田 坦

委員 安藤 正人

早瀬 明

福谷 茂

橋本 武志

次田 憲和

協力 竹内 亨

子野日俊夫

松田 直成

執筆 者 紹 介

吉川 康夫	帝塚山学院短期大学助教授
安藤 正人	川崎医療福祉大学教授
小川 清次	大阪府立工業高等専門学校講師
橋本 武志	高野山大学非常勤講師
次田 憲和	大阪体育大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第4号

1997年12月20日 発行

編集・発行 京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表 藺田 坦
〒606-01 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
T E L (075)753-2813
振替 01080-3-31430

印刷所 協和印刷株式会社
〒615 京都市右京区西院清水町13
T E L (075)312-4010(代)

定価 1200円(本体 1143円)

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 4

Yasuo YOSHIKAWA : Der Mensch „a („als) Is ein Seil“	1
—Die Problematik des Menschen und der Gemeinschaft unter nihilistischen Umständen—	
Masato ANDO : Le Doute Cartésien	26
—d'après les <i>Objections et Réponses des Méditations</i> —	
OGAWA Seiji : Die Vermittlung von Bürger und Staat	44
Takeshi HASHIMOTO: Über die Vieldeutigkeit des Begriffs der Möglichkeit bei Heidegger	61
TSUGITA Norikazu: Der Engpaß der naturalistischen Ontologie	78
—die selbstbezügliche Struktur der transzendentalen Konstitution in der regionalen Ontologie Husserls—	

1997

Epistola X

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University